市報とおかまち
平成20年（2008）December　第89号
TOKAMACHI
12.10

だんだん

棚田も冬支度

松代星峠の棚田にも初雪が降りました。これから約半年間雪の下になります。来年の春、雪が解けるとまた緑あふれる美しい姿を現してくれることでしょう。来年は棚田サミットが十日町市で開催されます。

愛称「だんだん」は、方言のあいさつ「だんだんどうも」、「河岸段丘・棚田」、「ステップアップ」などを表しています。

主な内容

- ［特集］やまを守る …… 2-15
- 補助金見直し検討委員会提言／復興基金事業 … 16-17
- 中小企業向け緊急経済対策／表彰 …… 18-19
- 国体開会式観覧者募集／協働のまちづくり情報⑧ … 20-21
- 3小学校閉校式／雪処理に注意 …… 22-23
- 第60回十日町雪まつり …… 24-25
- 地域の風～支所からのたより～ …… 26-27
- ときめきネットワーク／トキめきのキセキほか … 28-29
- まちの話題 TOPICS／年末年始の市の業務ほか … 30-31
- お知らせ・ガイド …… 32-33
- ジュニア芸術祭 －貝野小学校－ …… 34

特集 やまを守る

日本のふるさとの原風景として、その自然美が人気の棚田。現在では、1年をとおして多くのカメラマンが訪れ、被写体としてカメラが向けられています。

山あいのなだらかな斜面に、魚のうろこのように階段状に広がる棚田は、地元では「やま」とも呼びます。「やまへ行ってくる」「やまで仕事する」というように、人々の生活の中にあります。

狭い耕地を切り開き、水を引き、里山の自然に人が手を加え守ることで、農を生業として人と自然が共存してきました。しかし、農家の高齢化や後継者不足、また生産コストの面からも効率のよい平地へと農地がまとまり、これらの棚田は耕作放棄されつつあります。

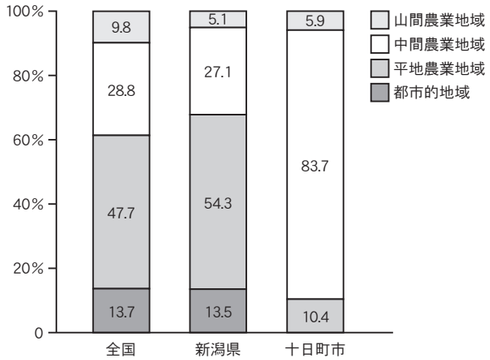
近年、農家だけでなく、都市部の人たちからも棚田の良さや必要性に目が向けられ、みんなの手で守っていこうという動きが活発になっています。中山間地域に立ちはだかるさまざまな問題に独自の手法で「動き」を起こし、新たな農業の活路につなげるとともに地域の活性化へ結び付けながら頑張る人たちがたくさんいます。そのいくつかの取り組みを見ながら、新たな中山間地域農業の将来を考えます。

市内の農地の多くは中山間地域に

中山間地域とは、山のすそ野に当たる部分をいい、山間地から平地の周辺部までの地域を指します。これらの地域は、傾斜があり農地も狭いことから、平らな農地に比べて農業条件が不利だとされ、農業の施策のうえでも多くの制度が設けられています。

市内の農地を農林水産省が示す地域類型別にみると、山間農業地域と中間農業地域を合わせた、いわゆる中山間地域が全体の約94パーセントを締め、全国的にも高い割合になっています。（表1）

【表1】 耕地の地域類型割合



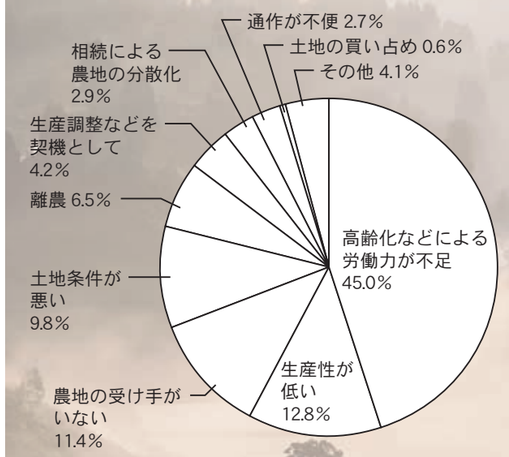
※農林水産省の農業地域類型区分による（2005年農林業センサス）

減りゆく農地

全国的に農家や農地が減少する中で、十日町市でも30年前と比べると農家が約3、700戸（38%）、農地は2、000ヘクタール（27%）減少しています（表2）。農地が減少した原因として、自然災害や用途の変更などがありますが、最も多いのが耕作放棄です。2005農林業センサスでは、耕作放棄地は全国で約38万6千ヘクタール、十日町市では510ヘクタールとなっています。㈶農政調査委員会の調査によると、耕作放棄地の発生要因として最も高いのが「高齢化などによる労働不足」で、次いで「生産性が低い」、「農地の受け手がいない」などが挙げられています（表3）。全国的にも労力不足が農業に大きな影響を与えていることがうかがえます。

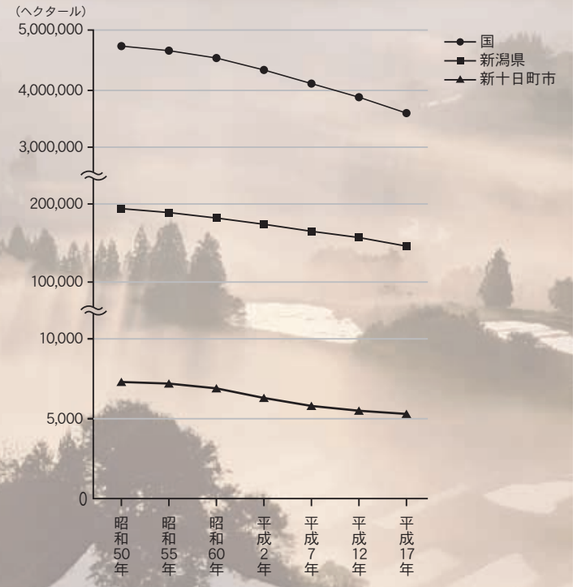
このような中、各地域での主な取り組みを見てみましょう。

【表3】 耕作放棄の発生要因



㈶農政調査委員会「農業振興地域・農地制度等の実態把握及び効果分析に関する調査」
（平成16年2月　全市町村を対象に調査）

【表2】 経営耕地面積の推移



※2005年農林業センサス

Ⅰ グリーンツーリズム

過疎化や高齢化が進む中山間地域。この限られた農村人口、限られた労力の中で、交流の輪を広げ外部からの協力を得ながら農地を守り、農業を継続する取り組みが行われています。お互いが協調し地域ににぎわいを呼んでいる取り組みを見てみます。

❶交流で元気を注ぐ

松之山・浦田で農業体験民宿を営む田中富士雄さん。田中さんのもとには、県内外から年間延べ1、000人が訪れます。目的は、「自分でおいしい米を作って食べたい」「農業や農村の暮らしを学びたい」「棚田を守りたい」など多種多様。多くの人々が集うその魅力と仕組みとは

全身泥まみれで自然に親しむ、東京農工大学「耕地の会」による泥リンピック

山あいににぎわい 地域に元気呼ぶ

関田山脈から流れる渋海川のほとり、浦田地内にある田中さんの体験民宿は「農業・農村」をテーマにした交流の拠点として、平成10年に開業しました。包み隠さず、ありのままに付き合う田中さんの人柄に魅力を感じて、棚田フットワーク（代表岩野行孝さん）のメンバーや「新潟と松之山を結ぶ　棚田の楽校」（新潟市　代表市嶋彰さん）の会員、大学の学生など、県内外から多くの人たちが訪れます。主な交流の舞台は、山あいの棚田。20アールの広さの中に約40枚の水田があります。ここで、農業をとおして食のありがたさや農村文化を学び合いながら棚田を守る活動が行われています。

初心者に田植えを教える田中さん

末長い交流 体験から本物へ

田中　富士雄さん（浦田・61歳）

特に何のまかないもしているわけじゃないけど、よく来てくれます。飾るつもりは一切ないが、お互いが楽しめる仕組みは必要だね。泥リンピックもそうだし米のほう賞もそうだし、次につながるために一過性の体験で終わることなく、本物を知ってもらうことが大事だと思うよ。その「本物」を知ってもらうために自分ができることをやるだけ。そうゆうのをみんな求めているんじゃないかな。だんだんと体験学習から本物学習に時代が変わってきているのが分かるね。

やむをえないことだろうけど棚田が草ボウボウだったり、農薬で立ち枯れた草があったりしたらみんな来てくれないだろうね。だから手間をかけるんだよ。それがつまりここを守ることにつながっていくんだろうね。こうしてみんなが長年来てくれるのも、ここを守っていくことに協力してくれているんだね。

継続を力に 棚田人認定制度

田中さんのもとに集う人たちが年1回一堂に会した収穫祭が開催されます。1年間の農作業の慰労会と自然への収穫の恵みに感謝して毎年11月に行います。ここでは、初めて会う人もいつの間にか親しい友だちになります。それもそのはず、みんなが棚田を愛する気持ちがいっしょだからです。

この収穫祭では、年間の作業日数や作業への熟練度に応じて「棚田人認定証」が授与され、段位を取得できます。また、年間の作業時間に応じて「ご褒美米」として、棚田で自分たちが育てた米も贈られ、1人5kgから家族で参加している人は50kgにもなります。こんな楽しみが、来年も人々を棚田に誘う方法の一つになっています。

家族で棚田人に認定された新潟市の玉木有紀子さん、朗恵さん、清さん親子（写真左から）

山地に学ぶ農業の原点

東京農工大学の学生で作る「耕地の会」は、農業・農村、山の暮らしの知恵を学ぼうと10年前から年間を通じて訪れています。田植え前に行われる代かきを兼ねた「泥リンピック」も恒例行事。約10アールの田んぼをコートに、全身泥まみれになってバレーボールやサッカーなどのスポーツ大会を繰り広げます。

東京農工大学
「耕地の会」リーダー
高橋　典子さん（2年）

普段授業で学んでいることの実践の場として田中さんのところへ訪れています。この野山に囲まれた中での、解放感は格別です。泥リンピックは泥の感触を肌で味わえるので好評…（?）です。こうしていると不思議と農業に愛着がわいてきます。田中さんの厳しい指導にも親しみがあるので、また来たいって気持ちになります。

非効率ながら作業の多くを人の手に頼る山地の農業にこそ学ぶべき原点があると思うんです。もう一歩踏み込んで農業に触れたくて、今年4月からは毎週、田中さんのもとに訪れています。

おもしろい！ 可能性秘めた中山間地域

新潟県十日町地域振興局　農業振興部長　**岩野　行孝さん**
（棚田フットワーク代表）

「考えてばかりいないで動き出そう！」。そんな思いから、平成11年に「棚田フットワーク」を設立しました。中山間地域振興を担当していたころ、机上で「あーだこーだ」言ったって進展しないことが分かったんです。山間部の生産現場の疲弊は肌身に感じていました。実際に行動することで、むらが元気になる。その「元気」を作りたい。そして、農業を知らない人に農の楽しさや生きる力を養ってもらいたい。そんな思いが松之山の棚田での米作りに足を向かせたんです。会員は現在約120人。子どもから大人まで、県内外から集まってきます。平成17年からは、オーナーが耕作を断念した松之山地内の棚田を借り受け、素人軍団で米作り奮闘を続けています。春先の苗代づくりから、草刈り、稲刈りなど、農作業だけで年間延べ500人が訪れています。継続するためには楽しくなくてはならないので、「ご褒美米」や「棚田人認定制度」などを作ってきました。最近では、集落内水路の泥さらいや集落共同の草刈りにも参加するようになったので「猫の手」より少しましになったかな（笑）。この、都市と農村をつなぐ「結い」が農村部の力になります。

耕作放棄を防ぐことも、山村振興に欠かせない対策です。その一つとして、十日町地域振興局では、地元産そばの地産地消を進めています。十日町市・津南町をそばの里として、そばの生産拡大と安定供給に取り組んでいます。

これらを実践できる中山間地域はおもしろいです。平地は効率一辺倒ですが、山地でないとできないことがたくさんあります。手つかずの自然をうまく生かしながら「過疎」ではない「適疎」の発想で、心満ち足りた地域を作っていかなければなりません。

にぎわいのある棚田に目を凝らす岩野さん（右）と田中さん

十日町地域振興局が発行した「越後妻有そばの里ＭＡＰ」

Ⅰ グリーンツーリズム
❷荒廃田・廃校舎を生かして田舎体験

水不足で耕作をやめた水田を体験農園にして、首都圏の小・中学校、高校などの修学旅行や体験学習を集落で受け入れる取り組みが進められています。集落に活気をよぶ田舎体験事業が広がりを見せています。

廃校舎ににぎわいを

平成18年から「越後田舎体験事業」を進める名ヶ山集落では、現在6戸の家庭が生徒や学生などの民泊を受け入れています。

「最初の慣れないうちはね、来てくれる子どもたちにみんなが気を遣いすぎちゃうんですよ。そうすると疲れちゃって長続きしないんですよね。自分たちの子どもや孫と同じように接すれば楽しいんです」と話す小海公さん（名ヶ山・56歳）は、地区の代表として田舎体験の受け入れを切り盛りします。

「子どもたちに農作業の体験をとおして農村の良さを学んでもらおうと思うけど、田っぼ仕事は作業が限られちゃうからね。そこで体験農園を作ろうと思ったんです。野菜だと季節によって作る種類も異なるから、たくさん教えることがあるんだ」。現在、名ヶ山集落では旧名ヶ山小学校のグラウンドを市から借りて、野菜栽培を行っています。採れた野菜は廃校となった校舎で選別、こん包して出荷していて、この作業も田舎体験事業に結び付けています。

しかし、狭い農地の面積では、作る野菜の種類も限られ、農作業も短時間で終わってしまい、子どもたちに本来教えるべき農業のだいご味も伝えられないままになってしまいます。そこで、もっと広い面積で数多くの野菜や果物を作ろうと、グラウンド脇にあった約1ヘクタールの荒廃田を埋め立てて、体験農園にすることにしました。

五感で体験させたい

小海さんは、「じかに野菜を収穫することで季節感を味わってもらいたいね。ジャガイモを掘り起こすころにはホタルを見に行き、暑い夏にはセミの鳴く中で、トマトやキュウリをもぐ。五感で自然に触れることで奥深い思い出になると思うよ」と子どもたちと向き合います。

工事は、今年夏から行われ、来年には作付けが始まります。新しくできた体験農園ではブルーベリーやラズベリーなどを作り、廃校となった校舎の一角を利用して、ジャムなどの加工品を生産する構想をふくらませています。

田舎体験事業をきっかけの一つとして、使われなくなった水田や学校を新たな交流の手段として生かし、集落に活力を呼ぶ取り組みが始まります。

越後田舎体験

旧松代町、旧松之山町を含む旧東頸城などの町村（現十日町市及び上越市）で構成する「越後田舎体験推進協議会（事務局所在：上越市安塚区）」では、平成11年から都市の子どもたちを受け入れる「越後田舎体験事業」を実施。協議会は地域内の観光施設や体験・宿泊・飲食施設と体験指導者などで構成し、実際の体験事業の受け入れ先である農家・漁家で構成する地区協議会と連携して事業を実施している。平成18年からは十日町地域もエリアに含め受け入れを開始。現在市内に年間を通じて17校延べ約2、000人が訪れている。

Ⅰ グリーンツーリズム
❸守れ棚田！大切な観光資源

農家の後継者がいないことから、耕作放棄されそうな水田を温泉旅館や農業公社、その住民が連携して守る取り組みが行われています。棚田は農の営みの場だけでなく貴重な観光スポットになっています。

かやぶきの山小屋（写真手前）は、観光協会や農業担い手公社によって大切に守られています

津南町との市境、急斜面に不ぞろいな田んぼが並ぶ天水島地内の「留守原の棚田」。かやぶきの山小屋が里山の印象を色濃くしています。

平成16年、田んぼの所有者が急逝し、耕作放棄の危機が訪れました。この棚田を守ろうと、地元の旅館などで作られた合同会社と農業担い手公社が役割を分担して耕作を受け継ぎ、観光と農業を結び付けています。

活動の中心となったのが、松之山温泉組合です。米作りを体験メニューに組み入れ、来訪者からの協力を得ることで棚田の保全と誘客に結び付けようと、都市部に向けて呼びかけました。棚田を守ることで、環境の保護や食の安全をテーマにした活動に多くの人たちが賛同し、毎年農作業に訪れています。

稲の生育管理や主な作業は㈶松之山農業担い手公社が請け負い、収穫された米は松之山温泉の旅館などで使われています。

同温泉組合では、今年4月に、組合内の有志により「松之山温泉合同会社『まんま』」を設立。この取り組みを観光プランの一つとして事業化し、継続的な活動につなげています。

松之山温泉合同会社「まんま」
代表　柳　一成さん（湯本・43歳　写真右）

棚田は人の手が加わって保たれている自然であり、生活感があります。留守原の棚田をすっかり有名なスポットにしてくれた地主のおじいちゃんに感謝するためにも、守っていかなければなりません。最初の２年間は地区と旅館や飲食店が中心に米作りをしてきましたが、60アールもあるので大変なんです。そこで、おととしから作付けは担い手公社にお願いするとともに、観光として商品化するために、今年合同会社を設立しました。

この活動に、主に関東圏に住む皆さんで構成する「とんぼproject」（代表池田徹さん）が賛同してくれて、稲作に協力していただいています。このようなつながりが地域に活力を呼んでいると思います。「地域にある魅力を生かし、ないものねだりをしない」をコンセプトの一つにしながら、訪れる人たちもそして自分たちも楽しめる着地型の事業に取り組んでいきたいと思います。

とんぼproject
代表　池田　徹さん（四日町・51歳　写真左）

メンバーの多くは、東京、千葉、埼玉などに在住しています。私は東京に会社があり週末は地元の十日町市に帰ってきます。私たちのグループは、地球の自然環境を守ることや持続可能な循環型社会を確立するために何をしたらよいか？などをテーマに活動しています。松之山にも何度か訪れ、耕作放棄で棚田がなくなっていくことを危惧（きぐ）しています。そんな中で私たちが役に立てればと思い、ここでの活動に加わりました。川の上流にあるこの地域が守られることは下流部に住む人や海の保護にもつながります。自分たちが受けている恩恵を考えると、棚田や山林の大切さが分かります。ここで採れた米の収益金の一部をブナ林の再生に寄付するなど、自分たちができることを楽しみながら実践しています。

Ⅱ 売れる農作物づくり

売れる農作物作りは農業の大きな課題です。そんな中、持ち前のノウハウと地勢を生かし、独自の方法で売れる農作物作りに挑んでいる農家があります。農業の発展は、広く地域の発展につながります。特徴だったいくつかの取り組みを見てみます。

❶アイガモとともに　安全・安心で築く信頼

自ら「合鴨ごんべい」と名乗り、合鴨農法にこだわりを持つ上村一昭さん（南鐙坂・59歳）は、無農薬で化学肥料を使わないJAS(財)自然農法センター認証の有機米栽培に取り組んでいます。安全で安心できる作物を届けるため手間ひまを惜しまない姿勢が信頼を呼んでいます。

農業のパートナーであるアイガモを愛おしむ上村さん。デリケートなアイガモは人の気配に敏感

自然相手に試行錯誤の繰り返し

合鴨農法に取り組んだのは、15年ほど前。除草剤で立ち枯れた草を見て、いたたまれず手がけたのがこの方法。実際に取り組んでみると、理想とは裏腹に自然の厳しさに手を焼きました。アイガモを田んぼに放しただけでキツネやタヌキ、カラスなどに狙われ、飛べないアイガモは次々と犠牲になりました。「一晩で90羽のアイガモがキツネにやられてね。農業のパートナーがやられたようなせつない気分だったよ」と当時を振り返ります。

ずる賢いキツネの進入路。対策はいつもいたちごっこ

鳥獣の防護ネットに張られた電熱線

合鴨農法のメリットは、鴨が雑草を食べるので農薬を使わずに済み、泳いだときに稲の株元を刺激することで、稲の生育に効果があると言われています。しかし、この農法も微妙なコントロールで勝敗を分けます。ノウハウが無く挑むのは、即、失敗に結び付くと話します。

「安全・安心な農作物。環境保全型農業。今、消費者が最も求めているものだというのが直に分かります」。上村さんは、県内のホテルと提携して、無農薬体験農園を運営したりホテルのバイキングでコーナーを設けたりしながら消費者と交わす会話の中でその必要性を実感し、自らの農業で実践しています。

農業は冬場の就業確保が大きな課題です。上村さんは、商売として農業を営むために、農産物の需要が増える冬のレジャーに目を向け、山菜や野菜のハウス栽培に取り組んでいます。もちろんここでも無農薬栽培。「スキーに来たお客さんに山菜を出すと驚かれますね。お客さんが必要なときに必要なものを必要なだけ提供する。その信頼が大事なんです」。

ホテルスポーリア湯沢
支配人　鈴木　真理子さん

稲刈りも実践して納得する鈴木さん（写真右）

自分たちが納得できるものをお客様にお出ししたいという思いから、上村さんが作ったお米や野菜を使っています。初めて稲刈りをしましたが、大変な苦労だということが分かります。半年間、アイガモとともにキツネや虫、作物の病気と闘っているんですからなおさらです。当ホテルでは、3年前から上村さんの無農薬野菜を使った丸かじりバイキングを実施していますが、旬のものを新鮮なままお出しするので、野菜本来の味がするといってとても好評です。また、お客様から上村さんの農場に足を運んでいただく収穫体験も行ったりして、じかに野菜や土に触れられる機会を提供して食への関心を持っていただいています。

Ⅱ 売れる農作物づくり

❷「温泉・雪」資源で育てるユリの女王「カサブランカ」

昭和40年代ころから、米中心の農業から一歩踏み出し、さまざまな農産物の栽培に取り組んできた中里地域。温泉熱と雪室（ゆきむろ）を利用して観賞植物の代表格である「カサブランカ」の産地化を進めてきました。地域の資源をふんだんに生かした取り組みを見てみます。

温泉熱で栽培

平成7年、旧中里村営温泉施設「ゆくら妻有」の建設に向け、原町地内に温泉掘削が始まりました。湯量も豊富であったことから、温泉熱を利用した「カサブランカ」栽培を進めようと同地域内で中里村温泉熱利活用研究会（根津一男会長　会員4人）を設立。実用化に向けた検討が進められました。

温泉の配管の途中で分湯し、ハウス内を循環。冷めた温泉は再び源泉の湯と熱交換されて再利用されます

市場で優位を占めるには、長い期間の出荷が求められますが、雪国では春先の植え込み時期がどうしても遅れてしまいます。そこで、思いついたのが温泉熱。現在は、この温泉熱を利用して6月から12月まで出荷しています。

同会会員の高野茂実さん（白羽毛・55歳）は、「露地栽培に比べて1か月ほど早く植え込みができます。地熱も10度以下にならないので根の張りがよく、丈夫なカサブランカに育ちます。春先の暖房で灯油の使用を節約できるので、経費はもちろん環境にもやさしい栽培です」とその効果を話します。

環境への意識は高まり、6年前から農薬を使わない土の蒸気消毒にも取り組んでいます。「いい花を作るのはもちろんですが、イメージも大切。葉に農薬が付いていたら、買う人はいやですよね」。「ユリの女王」といわれるカサブランカの気品を保つ努力が、1本当たりの付加価値を高める結果につながっています。

雪室で予冷保管

採取されたカサブランカは集荷元であるJA十日町中里花卉野菜集荷センターに運び込まれます。ここでは、刈り取りから出荷までの間、鮮度を保つため雪室で予冷保管されます。雪室は、春先3月にロータリー車で投雪します。同センターの江口豊センター長は、「野菜や花は、夏の鮮度管理が大きな課題です。雪室内は、気温約5度で、雪解けの適度な湿度があり、保管には最も適した天然の冷房設備です。雪国の資源を特産品作りに生かしています」と話します。ここでも、環境に思いを寄せた取り組みが行われています。

つぼみのカサブランカを丁寧に刈り取る高野さん

雪室にカサブランカを保管する中里村温泉熱利活用研究会会長の根津一男さん（写真左）と高野さん

Ⅱ 売れる農作物づくり

❸大地の芸術祭を契機に「農」と「食」で都市と農村を結ぶ

平成12年から3年ごとに行われている現代アートの祭典「大地の芸術祭」。過去3回の開催の中で築かれたネットワークを生かし、都市と農村を「農」と「食」でつなぐ取り組みが地域に活力を呼んでいます。

都市と農村を行き交う クロスカントリー

まつだい駅南、約60ヘクタールの里山に約40の野外作品が散りばめられたフィールドミュージアム。その中心が「まつだい雪国農耕文化村センター」（まつだい農舞台）です。

まつだい農舞台は、「大地の芸術祭」で生まれた都市と農村との交流を芸術祭以外にも引き込むため、首都圏へのPRや地域の暮らしを体験できるプログラムを実施しています。

その主な取り組みの一つが「まつだい代官山クロスカントリー」です。平成16年から始まった「まつだい代官山クロスカントリー」は、都市と農村が直接結び付くという思いから「クロスカントリー」と名付けられ、現在、松代、松之山、中平集落から7組の農家が作った自慢の農作物が都市部に送られています。地域で採れた安全な「旬」の野菜が毎週代官山の直売所や契約先のレストランに届けられ人気を呼んでいます。その秘けつは、新鮮さと安さ、そして品数の豊富さ。1回で40から50種類の野菜が届けられるので、買う側も料理のバリエーションが広がります。これも、多くの農家が得意な作物を作り提供し合うことで支えられるメリットです。

これらを企画したまつだい農舞台は、大地の芸術祭への参加、協力をとおして十日町市でできることと都市部が求めていることを見いだし、それらを引き合わせることで企画の立案・実施へと結び付けています。

生産者
小林　昇二さん（滝沢・53歳）

平成15年の大地の芸術祭で、地元の山野草を使った作品の制作に協力したことから、まつだい農舞台とのつながりが始まりました。現在は、山あいにある10アールほどの畑で、約20品目50種類の野菜を栽培して届けているけど、この種類の多さがまつだい代官山クロスカントリーのいいところなんだろうね。野菜は手間がかかるけど、稲作りのタイミングを見て作業がかち合わないように栽培できるので、春の山菜から11月の雪降り前まで作物を絶やさず送り込めます。都市部へ売り込みたいと思ってもなかなか手立てがないけど、農舞台が仲介して売り先を広げてくれるので、作りがいがあるよ。

2009年は第4回大地の芸術祭開催年

「大地の芸術祭」は、十日町市・津南町を舞台に世界40の国と地域から約200組の作家が参加する野外現代アートの祭典。平成12年以降3年ごとに開催されていて、鑑賞者も延べ約35万人（第3回展実績）を数える国際的アートイベントへと成長してきました。開催には、作家とともに地域住民や首都圏の若者を中心としたサポーター団体である「こへび隊」、また芸術祭を主に資金面で支える「大へび隊」の協働による活動が大きな原動力になって、地域を活気付けています。

代官山でのお祭りに模擬店を出店。顔の見える販売で安心を届けます

Ⅲ 制度を生かせ

耕地が狭く農作物の収穫量に限りがある中山間地域では、国や県・市のさまざまな制度が適用されています。このような制度を有意義に生かしながら、自らの知恵をしぼって農業や地域の振興に役立たせている取り組みがあります。

❶構造改革の波を農業に生かす

構造改革の目玉として国が推し進める構造改革特区制度は、自治体や民間事業者の提案により、特定の区域に限定して法律などの規制を緩和する制度です。それぞれの自発的な活動を促すことで地域経済の活性化を目指そうと、平成14年に構造改革特別区域法が施行されました。そして、翌15年に農村活性化特区として旧東頸城郡の6町村が認定になりました。

その一つが「濁酒（どぶろく）特区」です。酒類の製造は、酒税法による年間最低製造量などの規制により一般には認められていません。濁酒特区は、農家民宿や飲食店などを営む農業者が、自ら生産した米を原料として濁酒を製造する場合に限り、製造量の規制を緩和して認められる制度です。この制度を活用して、新たな農業戦略が展開されています。

どぶろく特区認定第1号

平成16年に、岩手県や長野県の農家とともに旧東頸城郡内の3人が第1号免許を取得しました。その一人、若井明夫さんは、空き家を使った農家民宿に着手。農村活性化特区により、農地法や酒税法などが緩和されたことで新たな農業戦略が展開でき、農家民宿を利用する人たちとのネットワークが広がっています。「ものを作ることは時間をかければできるが、それをどこへ販売するかがカギ」と話す若井さん。特区制度とグリーンツーリズムを合わせた独自の方法で輪を広げています。

「この地域で都市交流を広げるには、交通が大きな足かせです。時間と費用を考えると都市近郊の農村部に比べてよほどのメリットがないと厳しい。今後、さらに交流人口を増やすには、集落コミュニティの維持や棚田の保全に協力する人たちへの支援も必要です」と直面する課題を投げかけています。

制度追い風に　新たな農業スタイル展開

若井　明夫さん（松代・60歳）

棚田が主な耕作地なので、作付面積を広げるには限界があります。年々歳を取るごとに厳しさを実感してきて、将来を危惧するようになりました。作物を作るだけの農業経営に閉塞感を抱いていたことから、空き家を使った農家民宿と農業体験の受け入れを始めました。始めた当初は、さまざまな法律の規制があって思うように進みませんでしたが、構造改革特区がスタートしたことをきっかけに、特徴ある農業を営もうと市民農園やどぶろく特区の認定を申し入れました。この制度を利用することで、自分に合った農業展開ができました。どぶろくはもちろん、納豆の製造など、無農薬・無化学肥料で米や大豆を育て、それらを原料に製品化に結び付けています。それらが一つの手段となって、広がりを持ちネットワークができている気がします。新しいことに挑戦したころは失敗も多く、投資することに心配もありましたが、今はやってよかったと思っています。おそらく、この構造改革制度がなかったら、自分の農業は立ち行かなくなっていたでしょうね。

杜氏経験者から直伝のもろみ造り作業。
オリジナルなどぶろく造りにこだわります

自家栽培の大豆で作られる納豆

Ⅲ 制度を生かせ
❷中山間地域にいぶき吹き込む 中山間地域等直接支払制度

集落をまたがり広域地区一体で農地を守る

市の北側、柏崎市と長岡市に接する仙田地区。地区内には渋海川が流れ、地区のいたるところに「瀬替え」といわれる、川の蛇行を埋め立てた水田が点在します。地区内には10の集落があります。そのほかに、居住者が不在となった集落で通いながら農業が営まれる2集落を含め、合わせて12集落を一くくりにして、中山間地域等直接支払制度（以下、直接支払制度）の対象地にしています。

直接支払制度は、対象面積に応じて交付金が支払われます。多くは、耕地のある集落単位に農家が協定を結び、農業を継続するための活動を行っていますが、川西地域では地勢を同じくする3つの地区にまとまって協定が結ばれています。

そのうち、市内でも最も多くの面積を対象としているのが仙田地区です。仙田地区では、平成12年度の同制度発足当初から地区内の農家で「仙田地区集落協定」を結び、現在は155人が加入。対象面積は約104ヘクタールで、交付金も年間約2、100万円に及んでいます。

瀬替えの田んぼを案内する高橋さん。
眼下には、長岡市へ向う渋海川が流れます

将来見越した交付金の活用

直接支払制度の交付金は、半分以上を地区の共同活動に使うこととされ、その使途は農地を守るための農業施設の整備や交流活動などに充てることができ、幅広く農業・農村の発展に役立てられています。

仙田地区では、交付金のうち約60パーセントがこの共同活動に充てられ、残りの40パーセントが農地面積に応じて、各農家に配分されています。

この共同活動に充てられる60パーセントのうち、35パーセントが地区内の4つの地区営農組合に配分され、直接支払制度の対象となっている農地に加え、対象とならない農地でも稲の作付けが可能なところへは案分して振り分けられています。

残りの25パーセントは、地区全域の共同活動経費として使い、その一部で直接支払制度の帳簿書類を管理する専従者を置いています。交付金は公金であり、その収支は、出納帳の記帳や関係書類の保存、決算処理や税金の基礎書類など種類も多く、それらを集落ごと、地区営農組合ごとに作成するので煩雑を極めます。とかく、事務手続きの複雑さから代表や経理担当へのなり手がいない中で、専従者を置くことで、これらの不安を解消することができました。

中山間地域等直接支払制度

耕作放棄を防ぎ、農業を継続することで農地の持つ役割を守ろうと、平成12年度から実施されました。5年単位で見直され、今年は第2期対策として通算9年目。まとまりのある農地を単位に農家が「集落協定」を結び、傾斜のある農地面積に応じて交付金が支払われます。交付金は、2分の1以上を農業と集落の活性化のための活動に使うこととされています。5年以内に対象農地内で耕作放棄をしたり協定で取り組むべき事項が行われていない場合などは、交付金の返還規定もあります。

中山間地域等直接支払制度の概要〈平成19年度〉

	協定数	集落協定参加者数	交付面積	交付金額
国	28,708	640,624	664,540	51,698
新潟県	1,006	26,361	16,276	2,885
十日町市	145	4,168	2,835	542

（単位：件数、人、ha、百万円）
※交付金額は、国50％、県25％、市25％を負担しています

仙田地区集落協定事務局　高橋　幸一さん（赤谷・63歳）

直接支払制度の対象になるところと、ならないところに不公平感がでてはマズイ。地区全体の振興に結び付けたいという思いから、対象にならない農地も交付金配分の案分対象にしました。田んぼが耕作放棄になりそうな場合は、まず近くの耕作者で何とかする。それでもだめなら集落で、次は地区営農組合で農業を請け負うという申し合わせの中で、ここまで続けてくることができたんですね。その効果で、これまで耕作放棄が防げたんです。4年前の中越大震災でも多くの農地がやられましたが、交付金を充てながら無事復旧することができて、農地を守ることができました。この制度は5年単位ですから、高齢化が進んでくるとこの先の5年はキツイですよ。農業のみならず地区の運営もそうです。高齢者の冬場の生活や公共交通など地域全体を守る手立ても必要になってきますからね。これらをひっくるめて行政に頼らない仕組み作りをこれから考えていかなければなりません。

来年、創設から10年を迎える直接支払制度。「瀬替えの郷せんだ」として、先代の新田開拓の歴史を刻む仙田地区でも、約7割の農家が後継者不足から将来への農業に不安を抱いているといいます。「近隣の複数の集落で農業を守る、広域営農の強化が求められている。そして、限られた労働力の中で、将来守り伝えなければならない農地を維持するためにも、今のうちに農道や水路などの農業施設の整備に投資していかなければならない」と仙田地区集落協定事務局の高橋さんは話します。

新たな米の商品作りに挑戦

米の「十日町、十番勝負」と「源流魚沼」の発売

「魚沼十日町産コシヒカリ」はこの先「全国ブランド」として維持していけるのか、という危機感から新たな米の商品作りが始まっています。その一つは地域代表農家10人が、「魚沼産コシヒカリ」という知名度に頼ることなく、純粋に農家の技や農法で「食味」を競おうと、「コシヒカリ以外の米」を条件に、各自が自由に品種を選択。独自の技や農法を駆使して作った10種の米、これを1セットにして販売し、だれの米がもっともおいしかったか、購買者の「食味アンケート」によって勝負しようというのが、バトル型の「十日町、十番勝負」。

もう一つが、JA十日町が米づくりの原点に立ち返り、その名誉と威信にかけて発売する「源流魚沼」です。

■問合せ：十日町市担い手育成総合支援協議会（事務局：農林課6次産業振興室）
☎757-3120
十日町農業協同組合営農部　☎757-1573

「十日町、十番勝負」（写真上）と「源流魚沼」

十日町市に棚田サミットがやってくる

平成21年10月16日から2日間、十日町市で第15回全国棚田（千枚田）サミットが開催されます。棚田サミットは、棚田を守り、後世に残していくために話し合い、情報交換を図る会議として「全国棚田（千枚田）連絡協議会」に加盟する全国の市町村で開催されています。毎年、全国から1、000人もの関係者が参加し、棚田の保全や地域の活性化について話し合うとともに、各種制度制定への提言などが行われています。

第14回全国棚田（千枚田）サミット
平成20年10月16日～18日　長崎市・雲仙市

平成21年10月に十日町市で開催される第15回全国棚田（千枚田）サミットに向けて、市サミット実行委員会会長である田口市長以下事務局と棚田集落関係者の43人で視察と次回開催地ＰＲを目的に第14回棚田サミットに参加しました。長崎県長崎市・雲仙市で行われたサミットでは総会のほか、両市の棚田見学会や子どもたちによる事例発表などさまざまな催し物があり、また現地でのもてなしに感心することしきりでした。

参加者がふれあう全体交流会では、壇上で十日町市から参加した人全員で横断幕を持ちながら来年の開催地としてＰＲをしました。

棚田サミット

平成7年に「全国棚田（千枚田）連絡協議会」主催により高知県檮原（ゆずはら）町で第1回会議が開催されました。新潟県内では、平成10年に旧安塚町（現上越市）で同サミットが開催されてから2回目になります。

同協議会は、棚田がある全国の市町村や関心のある団体・個人による、棚田をとおしたネットワーク作りを目的として設立されました。

棚田サミットの中心的役割を担う棚田学会会長であり、棚田の権威である早稲田大学名誉教授の中島峰広さんに棚田の役割やサミットについてうかがいました。

中島　峰広さん

早稲田大学名誉教授。ＮＰＯ法人棚田ネットワーク代表。棚田学会会長。棚田サミット開催地選定委員長。全国棚田連絡協議会理事。「日本の棚田百選」の選定委員。著書に『日本の棚田‐保全への取組み』、『百選の棚田を歩く』（古今書院）などがある。

「棚田」はどんなところですか

棚田の風景はふるさとの原風景として、日本人の心の中に刻まれています。

平成11年7月、農林水産省が日本全国の117市町村、134地区の棚田を「日本の棚田百選」に認定しました。その時の選定基準として、原則として1ヘクタール以上のまとまりがあって、積極的な維持・保全がなされていること、また、国土や生態系、伝統文化の維持・保全が優れている棚田であることなどを主な要件としました。新潟県には7地区、十日町市には1地区がありますが、百選選定地以外にも、まだまだたくさんあります。

棚田の面積は、全国で約23万ヘクタールあると言われ、新潟県が一番多く、とりわけ十日町市、上越市には多く分布しています。

棚田の役割を教えてください

第1は、立地条件からしておいしいお米ができるということです。森の肥沃（ひよく）な土から浸み出す養分とか、寒暖の差であるとか、米作りに適したさまざまな条件がそろっていることです。

第2には、ダムの役割をするということです。殊に頸城の棚田地区は、あぜが高く、雨や雪解け水をためられるようにしてあります。全国の棚田に、仮にあぜの高さ分の水をためたとすると、黒四ダムの3～4倍の貯水量になります。最近「ゲリラ豪雨」なんてよく言いますが、棚田は一時的に水をためられるので豪雨災害を防ぐ役割もあります。

第3には、地滑りを防ぐ役割です。棚田は、いったん荒らすと地割れができ、そこから水が入り込むと地滑りを起こし、ばく大な損害を生むことになります。棚田とうまく付き合い維持することで防げるわけです。

用水路やため池がたくさんあるので、生物の生存環境には適しているし、最近では、多くの写真家の皆さんが来るのもこの風景が美しく五感を震わせるものがあるからです。また、農業体験などを総合学習にも取り入れるなど、教育の現場でも重要視されています。

これらを考えると、棚田は下流域に住む都市部の人たちにもかかわりがあることが分かります。

棚田では春先の水を確保するため、降雪前に田かきを行う

棚田サミットのこれまでと今後

棚田は傾斜地であることから、平場に比べれば、労力がかかります。加えて、どこの農村部も高齢化が進み、担い手不足になっています。その結果、耕作を断念せざるをえず、次第に耕作放棄地が広がってきました。棚田の持つ役割を維持するためにも、国を挙げての棚田を守る手立てが必要になったのです。棚田サミットでは、これまで議論を重ねながらさまざまな制度の導入を提言してきました。

近年、環境問題や食の安全性が重要視される中、学生や市民ボランティアが農村へ出かけ棚田保全活動を行うなど都市と農村の交流につながって地域の活性化に結び付いているところが多くあります。このような輪を広げるとともに、棚田がある地区の担い手をどう育てるか、喫緊の問題として仕組みを作る必要があります。サミットを通じて全国に棚田の必要性を訴え、これらの問題をいっしょに考えていきましょう。

棚田サミット開催に向けて

星峠区長
横尾　武雄さん

雲仙で開催された棚田サミットに行ってきました。どこも同じような課題を持っていると感じました。棚田の現状を言えば、集落が高齢化し地元だけでは維持管理ができない状況ですね。自分の田んぼだけで精いっぱいなんです。ですからお金だけの問題ではないですね。今直接支払制度があるから農道の整備や舗装をしているけど、これもいつまで続くかわかりません。手がないんですから。来年棚田サミットで全国から大勢集まります。各地の取り組みをヒントに、何か生かせればいいですね。

全国棚田連絡協議会正会員・
サミット選定特別委員
会員　木戸　幸子さん
（横浜市在住）

松代が生まれ故郷だったせいか、棚田のことがとても気にかかり、この協議会に入会しました。第1回目のサミットから参加していますが、講演や分科会などでは地域で頑張っている人たちの話が聞けて参考になります。過去の開催地では、サミット後も積極的に棚田保全や担い手確保の取り組みの意識が高まり、有意義な会になっています。サミット後の効果を見て欲しいと再度開催を希望しているところもあります。全国の自治体関係者や農家、一般市民、研究者、写真家が集まるので、垣根を越えた交流もこのサミットの楽しみの一つです。十日町市でサミットが開催されることになって、とてもうれしく思います。

特集のむすび

年々、耕作されない農地が増えつつある中山間地域ですが、ここだからできるもの、ここでしか魅力を出せないもの、そのようなものを探しながら取材を続けてきました。もちろん市内には今回紹介した皆さん以外にも多くの人たちが、更なる発展を目指して頑張っています。生命産業ともいわれる農を営み続けることは「やま」を守ることであり、地域を守ることにつながります。今ある環境を生かし一歩踏み出す取り組みが、地域に元気を呼んでいるような、そんな力強さを感じます。